九十九橋

て今も存在せり、和名抄に越前國丹生郡朝津阿左布豆とある是也、此に朝津と書て阿左布豆と訓たるも、本朝生津なりしを、生の字を、省る事上の如し、宗祇方角抄鯖江條に、淺水橋、黒戸橋、名所也云々、世俗のあさうづと云處に江河あり、是を玉江と云といへるは委しからず、其俗に淺生津といへる泥川にかゝれるが、あさふづの橋也、行囊抄に、上鯖江淺生津とついでゝ、淺生津は自溝落二里、町中ニ深キ泥川アリ、橋有、長十二間、此橋名所ナリ、アサフヅノ橋トヨメル是也、とあるぞ正しき、昔は此橋いと長かりけんとぞおぼしき、

〔夫木和歌抄二十一橋〕題不知懐中　よみ人しらず

あさみづのはしはゝのびてわたれ共ところ〴〵になるぞわびしき

〔拾遺愚草上〕はし

ことづてん人の心もあやうさにふみだにも見ぬあさむづの橋

〔太平記二十〕義貞首懸獄門事附勾當内侍事

中將○新田義貞中略、秋○延元二年ノ始ニ、今ハ道ノ程モ暫ク靜ニ成ヌレバトテ、迎ノ人ヲ上セラレタリケレバ、内侍ハ此三年ガ間、暗キ夜ノヤミニ迷ヘルガ、俄ニ夜ノ明タル心地シテ、頓テ先杣山マデ下著キ給ヒヌ、折節中將ハ足羽ト云所ヘ向セ給タリトテ、此ニハ人モ無リケレバ、杣山ヨリ輿ノ轅ヲ廻シテ淺津アサウヅノ橋ヲ渡リ給フ處ニ、瓜生彈正左衞門尉百騎バカリニテ行合奉リタルガ、馬ヨリ飛デオリ、輿ノ前ニヒレ伏テ、是ハイヅクヘトテ御渡リ候ラン、新田殿ハ昨日ノ暮ニ足羽ト申所ニテ討レサセ給テ候ト申モハテズ、涙ヲハラ〳〵トコボセバ、○略下

〔奥の細道〕福井は三里計なれば、夕飯をたゝめて出つるに、たそがれの路たど〳〵し○略中漸白根が嶽かくれて比那が島あらはる、あさむづの橋を渡りて玉江の蘆は夜に出にけり、

〔遊囊賸記二十三〕足羽川、其源今立ノ池田郷ヨリ出、此大橋ヲ下ヲ流テ、下ハ漆淵ニ至テ日野川ニ